『比較論理学研究』第 4 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

『分析論後書注解』におけるトマス・アクィナスの知識論 (3)
— *Expositio Libri Posteriorum*, lib.1, lect.3 による —

水田 英実

1．はじめに

トマス・アクィナスによる『アリストテレス分析論後書注解』の執筆時期について、諸説があって審らかにしないけれども、おおよそ 1268 年から 1272 年末の間の 1 年間とされる[1]。トマスの没年（1274 年）に近い時期に書かれているから、晩年の作品（ただし未完）である。しかし、「知識論に関するアリストテレスのこの著作は、トマスの体系的な著作のすべてに深い影響を与えている[2]。」それは言い換えれば、『注解』を書いた時期よりも前、『神学大全』(1266-73) や『対異教徒大全』(1259-64) といった、体系的著作の執筆にかかる以前に、つまりかなり早い時期に、トマス・アクィナスは既に何らかの仕方で『アリストテレス分析論後書』を入手し、読みこなしていたということでもあろう。

ラテン語に翻訳された『アリストテレス分析論後書』は、12 世紀のものが現存最古である。ヴェネチアのヤコブが 12 世紀前半（1125-1150 年）にギリシア語から直接翻訳したのに続いて、12 世紀中頃（1159 年以前）に、ソールズベリのヨハネがやはりギリシア語から直接ラテン語に訳している。少し遅れてクレモナのゲラルドによるアラビア語訳からの重訳（1189 年以前）が行われた。

トマス・アクィナスの生年は 1224/5 年頃であるから、その頃には既にラテン語訳の『分析論後書』が存在していたのである。ヤコブ訳の改訂版としてメルベケ訳がつくられたのは、1269 年頃とされる。そこでトマス・アクィナスによる『アリストテレス分析論後書注解』は、前半（1 巻 26 章まで）がヤコブ訳に、後半 (1 巻 27 章から 2 巻 20 章まで）がメルベケ訳に依拠してなされている。そのためこの『注解』の執筆時期が遅く設定される場合には、メルベケ訳を入手したあともヤコブ訳を用いて注解を行った時期があったと説明されることになる。

いずれにしても、トマス・アクィナスがヤコブ訳に触れることができたのは、後年に『注解』の執筆を始めるよりもかなり早い時期であった。学究生活の早い時期にこの『注解』を読む機会を得たことが、トマス自身の知識論の確立をもたらし、それが体系的著作の執筆を可能にしたと考えられるのである。

『分析論後書』においてアリストテレスは、確実な知識としての学的認識の成立について詳細に論じている。ヤコブ訳を入手したトマス・アクィナスは、そこからアリストテレスの知識論について学ぶとともに、自らの知識論を確立していったのである。ではトマス・アクィナスは、アリストテレスのこの著作から学ぶことによってどのような知識論を確立したのであろうか。

本論文において、われわれは『注解』第一巻第三講をとりあげ、そこにおいて展開された議論の跡をたどることを通して、この点の解明を図ることに努めたい。『注解』において示されたトマス・アクィナスによるアリストテレスの

[1] cf.『比較論理学研究』2 (2004), pp.1-8.
[2] Weisheipl,O.P., *Friar Thomas d'Aquino, His Life, Thought, and Works*, Oxford(1974), p374

所論の解釈を通して、早い時期に確立されたトマス自身の知識論についても、その特質を明らかにすることができると思われるからである。

『注解』第三講においてトマス・アクィナスが取り上げているのは、『分析論後書』第一巻第一章の最後の部分(71a24-b9)である。この箇所でアリストテレスはプラトンの対話篇『メノン』を引き合いに出して論じ、自らの知識論を展開している。この議論のあとを追うことを通して、アリストテレスの知識論の影響のもとに、トマス自身もまた自らの知識論を確立していったと考えられる。そこでトマスによる『分析論後書注解』の記述のあとを追うことによって、われわれもまたトマス・アクィナスの知識論が確立されるにいたった過程をたどることができると思われるのである。

2.『分析論後書注解』第一巻第三講

トマス・アクィナスによる『アリストテレス分析論後書注解』第三講は、次のように始まる。

> アリストテレスは、先の箇所で、「われわれは結論についての認識を得る前に、いくつか別のことがら(結論を引き出すための前提となることがら)をあらかじめ知っていなければならないけれども、それはどのようにしてであるか」ということを明らかにした。次にここでは、「演繹的推論や帰納によって結論についての認識を得る以前に、われわれはどういう仕方で当の結論そのものをあらかじめ知っているということになるのか」という点を明らかにしようとする。

『分析論後書』の該当する箇所(71a24-a26)でアリストテレスが取り上げるのは、「われわれは推論によって引き出される帰結そのもの(συλλογισμός)を、推論の帰結として知る以前に、ある意味で既に知っている。しかしある意味で知らない」という両義性の問題である[3]。

既知のことがらを前提にして推論によって得られる結論は、以前にはまだ知られていなかったことがらである。しかしその意味で未知のことがらであった結論そのものが、実はわれわれにとってある意味では既に知られていることがらでもあるという。端的に言えばまだ知らないはずのことを既に知っていると言うのであるから、知っているなら知らないはずはなく、知らないなら知っているはずはない。そうだとすれば、これは両立不能のことがらを容認しようとする矛盾を犯しているように思われる。

しかしアリストテレスによれば、推論によって得られる結論についての認識をめぐる上述の両義性は、事実として生じうることがらであった。そこで、アリストテレスは、以下の箇所(71a27-b9)において、この問題が胚胎するアポリアを回避するべく自らの解答を提示する。

『分析論後書注解』第一巻第三講において、トマスは、上記の問題に対するアリストテレスの論述について、論点を二つに分けて詳論している。第一に、この問題に関するアリストテレス自身の説がどのようなものであったかということについて述べる。次いで第二に、その説が、プラトンが提起した問題に対する、安易な解答をしりぞけるものであったこと、しかもそれがプラトンが提唱した説とは異なるものであったことを明らかにする。

2.1 アリストテレス説の特徴

さて、この箇所でアリストテレスが問題にしているのは、上述のように、推論によって得られる結論は、われわれがそれを推論の帰結として知る以前に、「ある意味で既に知っている。しかし、ある意味で知らない」という両義性にあった。もっともアリストテレス自身は、「〔ある図形が〕存在しているかどうか、全き意味で知らない場合には、どのようにして、〔その図形の内角の和が〕二直角であることについて全き意味で知っているということがありうるであろうか(71a26-27)」と補足している。「全き意味で」ἁπλῶς つまり「端的に」simpliciter に知っているかと問い直すならば、その意味では「知らない」と答えなければならない。端的に知ることと端的に知らないこととは両立しないと言わなければならなかったからである。

この点について、トマスもまたその『注解』において、われわれは推論の後に知ることがらをある意味で先に知っているとアリストテレスが

[3] lect.3, textus Aristotelis, c.1, n.7: Antequam sit inducere aut accipere syllogismum, quodammodo fortasse dicendum est scire, modo autem alio non. (メルベケ訳)

述べたのは、「端的 (simpliciter) には知らないけれども、ある意味 (secundum quid) では知っている」という意味においてであると説明する。異なる観点のもとであれば、知っているということ知らないということとが両立しうるからである。

それでは同じ一つの結論が、未知のことがらでもあるし、既知のことがらでもあるということは、どのような観点に立つときに両立すると考えられているのであろうか。この点をめぐって、アリストテレスは「(内角の和) が二直角である図形」についての認識を引き合いに出して論じている。トマスの『注解』によれば、アリストテレスは、ここで、「三角形は (総和が) 二直角に等しい三つの角を持つ」ことを例にあげて、「端的には知らないけれども、ある意味では知っている」ことがありうるとしているのである。つまり「三角形は (総和が) 二直角に等しい三つの角を持つ」ということを、論証によって知るにいたる場合、そのひとは「論証される以前には、端的に言えば知らなかった」のである。しかしそのとき既に「ある意味で知っていた」のである。アリストテレスが「ある意味では既に知っていたけれども、端的に言えばまだ知らなかった」と述べたのも、この意味においてであるという。

しかしこのような仕方で、論証以前の知と論証以後の知の間にある、二つの知り方の違いを区別することができるにしても、そうすることによって、結論について何らかの仕方であらかじめ知っていると言うことができるのか、それともそのような知は成立しないと言わなければならないのかということをめぐる曖昧さを排除することができるのであろうか。トマスによれば、この点は、前提と結論の関係について述べた『分析論後書注解』第一巻第二講[4] において既に明らかにされたことがらであるという。

第二講において明らかにされた前提命題と結論の関係とは、要するに、「結論に先立って前提となる命題が認識されていなければならない」ということである。第三講では、これをさらに補足して、「論証において、前提と結論の間にある関係は、自然における能動的原因が結果に対してもつ関係に等しい[5] 」と説明している。このような説明を加える根拠は、アリストテレスが『自然学』第二巻において「三段論法において前提となる命題は、それから何かが生じるものが原因と呼ばれるという意味で、結論の原因である」と述べたところにあった[6]。

このようにして、『分析論後書』第一巻の『注解』第三講においてトマスは、『自然学』第二巻の上述の一節にもとづいて、自然における能動的原因と結果の関係と同様の関係が推論における前提と結論の間にもあるという対応関係を見出す。そこからさらに次のように述べる。

> 結果は、現実態にあるものとしてもたらされる前に、能動的原因のうちに可能的な仕方で先在している。しかし現実態において存在しているわけではない。だから、端的に存在しているということにはならない。同様にして、論証における前提命題から結論が引き出される以前に、先なる仕方で認識された前提命題において、結論が能力態においてあらかじめ認識されている。むろん現実態において認識されているわけではない。〔結果が原因に内在する仕方で〕前提命題のうちに先在しているからである。この意味

[4]lect.2, n.2 (Marietti, n.14): Circa primum sciendum est quod id cuius scientia per demonstrationem quaeritur est conclusio aliqua in qua propria passio de subiecto aliquo praedicatur: quae quidem conclusio ex aliquibus principiis infertur. Et quia cognitio simplicium praecedit cognitionem compositorum, necesse est quod, antequam habeatur cognitio conclusionis, cognoscatur aliquo modo subiectum et passio. Et similiter oportet quod praecognoscatur principium, ex quo conclusio infertur, cum ex cognitione principii conclusio innotescat. cf. 拙論、『比較論理学研究』3 (2005), pp.1-8.

[5]lect.3, n.1 (Marietti, n.22): Principia autem se habent ad conclusiones in demonstrativis, sicut causae activae in naturalibus ad suos effectus.

[6]『自然学』第二巻第三章において、アリストテレスは「字母は語節の原因であり、材料は加工品の原因であり、火やその他このようなものは諸物体の原因であり、部分は全体の原因であり、前提は結論の原因であり、要するにそれらはそれぞれ当の事物がそれからであるところのそれという意味でその事物の原因である」(出隆訳『アリストテレス自然学』アリストテレス全集 3、岩波書店、1968) と記している。トマスは『自然学注解』において、これを敷衍し、三段論法における前提は結論の原因であり、それもそれから何かが生じ来るという意味での原因 (causa ex quo fit aliquid) であるとする。これを事物を作り出す原因 (causa efficiens)、あるいは能動的原因 (causa activa) と呼ぶのは『分析論後書注解』においてである。cf. Thomas Aq., *In Phys.*, lib.2, lect.5, n.8 (Marietti, n.183)

で、結論についての先なる認識は、端的に存在しているわけではないけれども、ある意味では存在しているということが明らかである[7]。

ここから明らかなように、アリストテレスの知識論の特徴は、「知る」ということが可能態において知る場合と現実態において知る場合とに区別されるところにあった。これによって、アリストテレスの知識論において、「ある意味で知る」とは可能態において知ることであり、「端的に知る」とは現実態において知ることであると説明することができたのである。

2.2 『メノン』のアポリア

次いで考察は第二の論点に移る。先に述べたように、トマスの『注解』によれば、知識の成立に関するアリストテレス説の特徴を明らかにしたことに続いて、アリストテレスはこの説が対話篇『メノン』においてプラトンが提起した問題に対する、安易な解答をしりぞけるものであったこと、しかもそれは、提起された問題に答する安易な解答をしりぞけるためにプラトンが提唱した説とも異なるものであったことを明らかにする。

さて、結論の認識をめぐる上述の両義性の問題は、『メノン』においてプラトンが提起した問題を継承するものであった[8]。この関連において上述の特徴を備えたアリストテレスの知識論は、プラトンが『メノン』において取り上げた問題を払拭するものであったことが示される[9]。

ところでアリストテレスが、『メノン』のアポリアとして挙げるのは、「ひとが学ぶことは何もないか、あるいは既に知っていることを学ぶに過ぎないか」、いずれにしても知らなかったことを新たに学ぶという仕方で知識が得られることはない、という問題であった。一方、プラトンが『メノン』(80D-E) において、登場人物のメノンに語らせていることを補うならば、吟味を要することがらとして提起されたのは、知らないことは探求のしようがなく、仮に見つけたとしてもそれが求めていたものであると知ることができないという不可知論である[10]。

他方、『注解』においてトマスが、『メノン』においてプラトンが取り上げた「解けない問題」dubitatio に言及し、「その問題はこのようなものである (Est autem dubitatio talis) 」と述べて説明しているのは、『メノン』において、登場人物のソクラテスが不可知論を克服するために導入した想起説である[11]。『注解』においてト

[7] lect.3, n.1 (Marietti, n.22)

[8] ヘンリクス・アリスティップスによる対話篇『メノン』のラテン語訳 (1154-1160) は、フィチーノによるラテン語訳プラトン全集 (1484) 以前に存在した数少ない翻訳の一つである。*Meno interprete Henrico Aristippo*, edidit Victor Kordeuter, recognovit et praefatione instruxit Carlotta Labowsky (*Plato Latinus* edidit Raymundus Klibansky, vol.1, 1940). 『メノン』のほかに、『パルメニデス』『パイドン』『ティマイオス』等のラテン語訳の存在が知られている。なおトマスは、この対話篇がプラトンの弟子の名前に因む名前を持つ (sic intitulato ex nomine sui discipuli.) と付記しているけれども、メノンは該当しない。紀元1世紀にプラトン全集を編纂したトラシュロスが、それぞれの対話篇に登場人物に因んだ名前と内容に即した名前が付けたということは、3世紀に『哲学者列伝』の中でディオゲネス・ラエルティオスが指摘していたことである。

[9] lect.3, n.2 (Marietti, n.23): excludit ex veritate determinata quandam dubitationem, quam Plato ponit in libro Menonis, ...

[10] 『メノン』80D-E は「徳とはそもそも何であるか」という探求が始まる箇所である。"MENON. Et quomodo queres, o Socrates, hoc quod non nosti ad totum quid sit? Quale enim eorum que nescis proponens queres? Si etiam quam certissime inveneris ipsum, qualiter scies, quoniam hoc est quod tu nescis? / SOCRATES. Adverto quid tu velis dicere, o Menon. Vides hoc ut litigiosum argumentum adducis, quoniam non igitur est querendum homini neque quod novit, neque quod non novit? Neque enim quod novit querat — novit quippe et non est opus tali cuilibet questione — neque quod non novit, minime siquidem novit quod querat." (アリスティップス訳。前掲書、p.21) もっとも『メノン』86B においてプラトンはソクラテスに「この説のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない」(藤沢令夫訳。プラトン全集9、岩波書店 (1974) pp.294.) と言わせている。想起説がイデア論と結びつけて語られるのは『パイドン』を待たなければならない。

[11] プラトンは、『メノン』81A 以下において、不可知論に陥ることを回避すべく、想起説 (それまで知らなかったことを新たに知るのではなく、知っていたけれども忘却していたことを思い出すという仕方で知る) を提唱している。この説は、ギリシア語を話すことができるけれども幾何学を学んだことのない少年が、与えられた問題 (与えられた正方形の二倍の面積を持った正方形の作図) に対して、質問されたことに正しく答えていくことによって、誰からも答えを教えられることなく、自分で解答 (与えられた正方形の対角線を一辺とする正方形を作図) することができるということを示すことによって検証されている。質問するだけで何も教えないのに答えることができたのであるから、もとから (生まれる前から) 知っていた答えを想起したのであって、新たに学んだわけで

マスは、次のように述べているからである。

いま、幾何学についてまったく何も学んだことのないひとを連れてきて、自明の原理から始めて、順を追って、幾何学上の結論がそれから帰結される、原理的なことがらについて質問をする。すると幾何学について何も知らないはずのその人は、そういった全てのことがらに対して一つ一つ正しい答えを重ねることによって、出された質問に正しいことを答えるだけで、結論を得るにいたる。このことから、他の学問の場合にも、それについて何も学んだことのないひとたちは、それについて教えられる以前に、既にそれについて知っているということになるであろう。そこで、およそひとが学ぶことは何もないか、あるいは既に知っていることを学ぶに過ぎない、ということが帰結する[12]。

トマスが用いたラテン語訳（ヤコブ訳）は、アリストテレスのいう「アポレーマ」ἀπόρημα の訳語として「両義性」ambiguitas をあてている。メルベケ訳も同様である。そして言うところの「両義性」とは、「ひとはおよそ何も学ぶことがないか、既に知っていることを学ぶに過ぎないか、そのいずれかである」というアポリアであった。

このアポリアに陥るとき、およそ何かを学ぶことによって知識を得ることはできないという不可知論がもたらされる。というより、知識の成立に関する上述のアリストテレス説を否定するならば、いずれにしてもひとが「学ぶ」ということが否定されるという、このアポリアに陥らざるを得ないと主張することによって、いわば搦め手から、アリストテレス説による以外にこのアポリアを回避することはできないことが提唱されているのである[13]。

3．プラトン説とアリストテレス説

アリストテレスのいう「『メノン』におけるアポレーマ (τὸ ἐν τῷ Μένωνι ἀπόρημα)」とは何であったのか。『メノン』80D-E においてメノンによって提起された問題がその中に含まれていることは言うまでもないであろう。しかしアリストテレスのテキストは、必ずしもこの問題に関するプラトン説（『メノン』の中でソクラテスによって持ち出された想起説）に明示的に触れているわけではない。アリストテレスが明示的に指摘しているのは、別のある人たちが試みたような解決法では、プラトンが『メノン』において提起した問題は解決できないということである。

これに対してトマスの『注解』は、問題の「両義性」に関して、アリストテレス説だけでなく、プラトン説にも言及している。むろんプラトン説とアリストテレス説では、問題解決の方法が異なる。それは「知」のあり方をどう捉えるかということをめぐる対立でもあった。

トマスが『注解』において述べるところに従うならば、アリストテレスは、現実的に知るという知り方のほかに可能的に知るという知り方があることを視野にいれることによって、このアポリアを回避することができたのである。『注解』においてトマスは次のように述べている。

ひとが論証や帰納的推理を通して学ぶ結論は、端的に知られていたのではなく、前提命題のうちに能力態における仕方で知られていたのである。前提命題について尋ねられたならば、〔現実態における〕知識がないひとであっても、〔可能態における知識にもとづいて〕真なることを答えることができる[14]。

ところがこの点でプラトン説は、アリストテレス説と異なる。それはプラトン説において、可能態において知るという知り方は想定されていないからである。したがって、もし結論があらかじめ認識されていたとしたら、端的に認識されるという仕方によるのでなければならなかった。トマスによれば、新たに学び知られたのではなく、むしろ何らかの推論によって記憶のうちに引き戻されて想起したのである[15]。プ

はない。しかし何も知ることができないことになるわけでもない。

[12] lect.3, n.2 (Marietti, n.23)

[13] じっさいこの箇所 (71a29-30) でアリストテレスは次のように述べるにとどまる。「さもなければ、『メノン』のあのアポリアがそこから帰結するだろう。すなわち、ひとは何ごとをも学び知ることがないか、それとも、〔すでに〕彼が知っているものを学び知るかのいずれかであることになるだろう。」（加藤信朗訳『アリストテレス分析論後書』アリストテレス全集 1、岩波書店 (1971)、p.615.）

[14] lect.3, n.3 (Marietti, n.24)

[15] *ibid.*

ラトンにとって知るということは、とりもなおさず現実態において端的に知ることを意味していたのである。

トマスの『注解』によれば、アナクサゴラスの考え方にもプラトンに近いところがあった。プラトンが認識の成立に関して可能態において知るという知り方を認めなかったように、事物の生成に関して、自然的形相の先在を提唱したアナクサゴラスは、可能態における先在ではなく、現実態における先在のみを認めたからである。自然的事物の形相は、事物の生成に先立って、質料のうちに端的に存在していると考えられている。

可能態における事物の先在を認めないアナクサゴラスに対して、アリストテレスは、事物の生成やひいては認識の成立に関して、可能態における先在を認める。しかも、この仕方で先在するからといって、端的に存在しているわけではないと考えていた。トマスによれば、この点でアリストテレスは前二者と異なる[16]。

3.1 アポリアの受け止め方

アリストテレスのテキストにおいて、「メノンのアポリア」に陥る謬説として取り上げられているのは、次のような説である。すなわちそれは、「双性(dualitas)」を有するものであっても、「双性」を有することが証明されて始めてそういうものであることが知られる場合があるという例をあげ、その場合には、全く新たに知識を得ることになるから、問題の両義性は解消されるとしたひとたちの説であった。

しかしアリストテレスによれば、この謬説によって問題の両義性が解消されることはない。それは論証以後に論証による仕方で知られることが、論証以前に論証による仕方で知られることがないとしても、そこには論証による仕方で知るか知らないかの違いしかないからである。『メノン』における問題は、論証以前に論証によらない仕方で知識を得ることが可能か否かにかかっていた。この点についてプラトンは、想起説による解決を試みたと言えよう。しかしアリストテレスは、プラトンとは異なる方法で問題の解決を試みたのである。それは、「何も学ぶことができない」とする不可知論を克服するために、「既に知っていることを学ぶにすぎない」ことを主張した想起説をも排除する仕方で、問題の両義性を解消する試みでもあったからである。

むろんそれは、単純に新しい知識が獲得されることを認める必要があると考えて、不可知論の克服を図ろうとするものでもなかった。トマスの『注解』によれば、この箇所(71a31sqq.)でアリストテレスが取り上げたひとたちは「論証される以前に、あるいは何らかの仕方で教えられる以前に、既に結論が認識されていたということはありえない」と主張したのである。このひとたちは問題の両義性を次のように理解している。

> いま誰かがあまり知識のないひとに、「双性のものはすべて等分できると知っているか」と問うたとしよう。知っているという答えが返ってきたら、その問われたひとがさしあたり双性のものと思っていないようなもの、たとえば「六の三分の一」を持ち出してみよう。そうするとこういうことになるであろう。このひとは〔すべて知っていると言ったのであるから、〕「六の三分の一」は二等分できる数であると知っていたはずである。しかしじっさいは、そういうことを既に知っていたということはなく、かえって論証に導かれて学び知ることになるのである。だからこのひとは、およそこういうことを学び知るということがないか、あるいは先に既に知っていたことを学び知るのか、いずれかであった

[16] *ibid.*: Sicut etiam de formis naturalibus Anaxagoras ponit quod ante generationem praeexistebant in materia simpliciter. Aristoteles vero ponit quod praeexistunt in potentia et non simpliciter. ちなみに、子の世代の個体を形成する形相が可能態において先在すると言われるのは、親の世代の個体を形成する個的形相として現実態において先在するのではなく、種的な形相として普遍的な仕方で存在しているという意味であろう。なお、アナクサゴラスは「ホモイオメレー」(ὁμοιομέρεια; 同質素)と呼ばれる無数の要素が混合した状態にあったところに、ヌースが働きかけて分離が起こり、優勢を占める要素の性質によってそれぞれの事物の特性が決定される(シンプリキオス『自然学』)と考えていたことが知られている。すべてのものの中にすべてのものが存在している(*ibid.*)と主張したことによって、事物の生成を説明するとともに、認識者による事物認識の成立についても、ある事物を構成するすべての要素がどの事物においても見出されるという現実的な対応関係の存在を根拠にすることができたのである。

であろうと思われる[17]。

要するにこのひとたちはプラトン説ともアリストテレス説とも異なる仕方で問題をとらえている。その上でこのひとたちは、与えられた問題に対処するために次のように解釈しようとしたとされる。

> 問われて、すべての双性のものは二等分できる数であると知っていると答えたこのひとは、すべての双性のものを端的に認識していると言ったのではなく、双性のものであることを既に知っていたものに限って、それを認識していると言ったのである。このひとは、持ち出されたような双性のものについては全く知らないでいた。だからこの双性のもの〔「六の三分の一」〕が二等分できる数であることについても全く知らなかったのである。こういうわけで、あるひとが前提命題を認識していたとしても、そのひとによって結論が先に認識されているということはない。端的に認識されているということもないし、ある意味において認識されているということもない[18]。

このひとたちの解釈に従えば、たとえば「六の三分の一」のような、一見してすぐに双性のものであることが分からないものは、それが「六の六分の一」ずつに等分されることが明らかにされることによって始めて、双性のものであると認識されるのである。そこで「すべての双性のものは二等分できる数である」という命題を認識したときに、このような具体的な例について、個々の事例に即して、それが二等分できるものであるということが、明示的にその認識内容の中に含まれているか否かが問われる。もしそのような仕方で含まれていると答えることができないのであれば、そのかぎり、前提に照らして結論が承認されるのは、論証の後であって、前ではないという主張が生まれることになると言わなければならないであろう。

しかしアリストテレス説に従うならば、結論についての認識が、論証に先立って成立すると言う余地があった。端的に知られているわけではないけれども、ある意味で知られていると答えることができたのである。それは、前提命題において結論が何らかの仕方で先に認識されているとしても、このひとたちが主張したように、論証の後で知られる仕方で明示的に認識されていると考えていたわけではなかったからである。そこでこの点をさらに明瞭にするために、『分析論後書』第一巻第一章の『注解』において、トマスは、プラトンが提起した問題に関してこのひとたちが示した解釈について、アリストテレスがそれをどのように批判し、排除していったかということを詳しく論じている。

3.2　固有の認識

『注解』によれば、プラトンともアリストテレスとも異なる仕方で問題をとらえたこのひとたちに対して、アリストテレスはまず、「〔確かな仕方で〕知られるのは、既に論証されたことがら、または新たに論証されることがらである[19]」としても、論証の及ぶ範囲に注意しなければならないことを指摘したのである(71a34sqq.)。

それは「双性のもの」に関する論証であれば、それが行われる範囲は「学び知るひとが知っているすべての双性のもの」ではなく、そのひとが知っているか否かを問わず、「端的にすべての〔双性の〕もの」に及ぶからである。同様にして、「数」や「三角形」についても、論証が行われるのは、「そのひとが知っている数や三角形」ではなく、「端的にすべての数や三角形」についてだからである。論証を伴う仕方で確かなことが知られると言われるからといって、数や双性について確かな仕方で知るということは、数であることあるいは双性であることを知っているすべての数や双性について知ることを意味すると考えるのは適切を欠く。端的に数あるいは双性について知ることができると言わなければならないからである。

『注解』によればアリストテレスはここで(71b3-5)、「知る」ということについて、たとえば「そのひとが数であることを知っているすべての数について知ることではなく、端的にすべての数について知ることである」ということを

[17] lect.3, n.4 (Marietti, n.25)

[18] *ibid.*

[19] lect.3, n.5 (Marietti, n.25): Illud scitur de quo demonstratio habtur vel de quo de novo accipitur demonstratio.

論じている。それを敷衍してトマスはさらに次のように論じる。

〔三段論法において〕結論は、〔二つの〕前提と媒名辞において一致する。すなわち結論の主語と述語は、それぞれ前提における大名辞と小名辞だからである。しかし、前提の中に、「君が知っている」という限定が付加された数や直線に関する命題は含まれていない。前提されるのは、端的にすべてに関する命題である。故に、論証の結論も前述のような付加のあるものではなく、端的にすべてに関するものでなければならない[20]。

最後にトマスは、『分析論後書』第一巻第一章の末尾の一節(71b5-8)を取り上げながら、アリストテレス説による問題の両義性を解消する試みがどのようなものであったかということを繰り返して明らかにする。このようなトマスの『注解』は、同時に、神的知性による事物認識が「固有の認識[21]」によるものであることを提唱するトマス説と軌を一にするものでもあった。人間知性による事物認識のあり方を解明することは、アリストテレスとは異なる仕方で神的知性による自己認識について論じ、完全な事物認識について論じることを排除するものではなかったからである。

いうところのアリストテレス説は、問題の両義性に関して、上述の不可知論に対してのみならず、想起説に対しても異を唱えるものであった。この点についてトマスは大略次のように論じている。

ある人が何かを学び知るとき、最初はその何かをある意味では知っているけれどもある意味では知らないということができる。知っているということと知らないということは、端的に言えば両立しない。しかしそれまで知らなかったことを新たに知ることができるのは、そのような矛盾を犯していないからである。それどころか、あるひとがこれから学ぶことをある意味で先に知っているのでなければ、そもそも何を学ぼうとしているのか全く分からないであろうし、何かを見出しても果たしてそれが求めていたものであるかどうかが分からないという不都合な事態に陥る。しかし、これから何かを学ぼうというときに、学び終えた後に得るであろう認識を、先に既に保持していたとすれば、それも不都合である。何故なら、あるひとが何かを学び知るとき、それまでなかった知識がそのひとのうちに新たに生じるからである。

なかったものが生じ、あったものがなくなるという、事物の生成消滅の過程は、果たしてそのまま知識の場合にも妥当するかどうか、吟味を要するけれども、ここではもっぱら生成の過程のみに着眼して、なかったものが生じるという変化を、可能態から現実態への移行として説明することができると考えている。事物の生成の過程を可能態から現実態への移行ととらえるのは、アリストテレス形而上学の根幹である。このようなアリストテレス説に依拠してトマスはさらに次のように説明を続ける。

さて、ものが生成するという場合、そのものは生成の前に、全面的に存在していなかったわけではなく、といって全面的に存在していたわけでもない。ある意味で存在し、ある意味で存在していなかったからである。じっさい可能態において存在しているものは、現実態において存在しているわけではない。可能態から現実態にもたらされるということが生成だからである。したがって、あるひとが学び知るにいたるものは、プラトンが措定したように、全面的にあらかじめ知られていたものであったわけではなかった。しかし、全面的に知らなかったわけでもない。これは、先に斥けた説において主張されたこと

[20] *lect.3, n.5 (Marietti, n.26): Conclusio cum praemissis convenit in terminis: nam subiectum et praedicatum conclusionis sunt maior et minor extremitas in praemissis; sed in praemissis non accipitur aliqua propositio de numero aut de recta linea cum hac additione, quam tu nosti, sed simpliciter de omni; neque ergo conclusio demonstrationis est cum additione praedicta, sed simpliciter de omni.*

[21] 『神学大全』第一部第十四問においてトマスは、神的知性が「固有の認識」によって事物を認識することについて論じている。cf. Thomas Aq., *Summa theol.*1,14,6c.: Sic igitur, cum essentia Dei habeat in se quidquid perfectionis habet essentia cuiuscumque rei alterius, et adhuc amplius, Deus in seipso potest omnia propria cognitione cognoscere. Propria enim natura uniuscuiusque consistit, secundum quod per aliquem modum divinam perfectionem participat. Non autem Deus perfecte seipsum cognosceret, nisi cognosceret quomodocumque participabilis est ab aliis sua perfectio: nec etiam ipsam naturam essendi perfecte sciret, nisi cognosceret omnes modos essendi. Unde manifestum est quod Deus cognoscit omnes res propria cognitione, secundum quod ab aliis distinguuntur.

である。そうではなくて、先行して認識されている普遍的な前提命題において、可能態における仕方であるいは能力態における仕方で知られていたけれども、「固有の認識 (cognitio propria)」にもとづいて現実態における仕方で知られていたわけでなかったのである。学び知るということは、可能的・能力的・普遍的な認識から固有的・現実的な認識にもたらされることにほかならないのである[22]。

主要文献

Aristoteles, *Analytica Priora et Posteriora*, recensuit brevique adnotatione critica instruxit W.D.Ross, praefatione et appendice auxit L.Minio-Paluello. Oxford, 1964(1982).

Aristoteles, *Physica*, recognovit brevique adnotatine critica instruxit W.D.Ross, (OCT) Oxford, 1950.

Barnes, Jonathan. *Posterior Analytics*, (in *The Complete Works of Aristotle*, The Revised Oxford Translation Edited by Jonathan Barnes, Vol.1) Oxford, 1984.

Larcher, F.R. *Commentary on the Posterior Analytics of Aristotle by St.Thomas Aquinas*. Magi Books, 1970.

Minio-Paluello, L. and Dod, B.G. *Analytica Posteriora, Translationes Iacobi, Anonymi sive 'Ioannis', Gerardi et Recensio Guillelmi de Moerbeka*, (in *Aristoteles Latinus*, IV, 1-4) Desclee de Brouwer, 1968.

Platon, *Menon*, in *Platonis Opera*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit I. Burnet, T.3, Oxford, 1903.

Platon, *Meno interprete Henrico Aristippo*, edidit Victor Kordeuter, recognovit et praefatione instruxit Carlotta Labowsky (*Plato Latinus* edidit Raymundus Klibansky, vol.1) 1940.

Thomas Aquinas. *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, cum textu ex recensione leonina cura et studio Raymundi M. Spiazzi. Marietti. 1964.

Thomas Aquinas. *In Libros Posteriorum Analyticorum Expositio*, (in *Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia* iussu impensaque Leonis XIII P.M. edita, Tomus I) Roma, 1882.

Thomas Aquinas. *Summa theologiae*, cura et studio Petri Caramello cum textu ex recensione Leonina, Pars Prima et Prima Secundae, Marietti, 1952.

Weisheipl, James A. *Friar Thomas d'Aquino, His Life, Thought, and Works*. Oxford, 1974.

（みずた　ひでみ, 広島大学［哲学］）

[22] lect.3,n.6 (Marietti, n.27)